

International Curriculum

国際基準を超える学び

日本医科大学の前身である「済生学舎」の校名は、ドイツの医学者フーフェラントの『医戒』に書かれた言葉「済生救民」（貧しく病で苦しむ人々を救う）からつけられました。明治初期、コレラ、赤痢、チフスなどの伝染病が流行し、西洋医の早期育成が急務だった時代のことです。当時の学生たちが西洋医学というテクノロジーを貪欲に学び取ったように、現在はAI、ロボット、仮想・拡張現実、モニタリング技術など、医療・医学に押し寄せるテクノロジー革命のうねりを前に、これらの新しい技術と知識を使いこなす医師の育成は急務です。本学は、国際認証基準に対応したカリキュラム、理系大学・学部と連携した教育・研究、最新の設備を備えた附属病院などで大幅な変革を続けています。これから医師を目指す若者が、テクノロジーを有効に活用できると同時に、そこで医師と医療はどうあるべきかを深く考察できる環境の整備を加速。国際基準のその先をいくカリキュラムを構築しています。



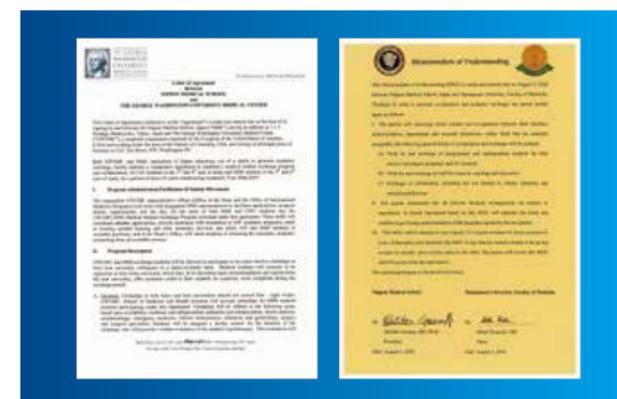
米国医師国家試験の受験資格に対応した、国際認証を受けたカリキュラムです。

アメリカの医師国家試験の受験資格を審査するECFMGが、2023年以降、医学教育の国際的認証を受けている医科大学・医学部の卒業生以外には受験資格を認めないと宣言しました。そのため、現在、日本の医科大学・医学部でもWFME（世界医学教育連盟）のGlobal Standardsに沿った改革が進められています。

日本医科大学は、国内医学部ではいち早く、国際認証基準への対応を行い、米国医師国家試験の受験資格を受けたカリキュラムとなっています。これにより従前のカリキュラムより、臨床実習が20週増加することになり、学生の負担が増えましたが、座学や実習についてICT技術を活用したe-Learningなどを積極的に導入することで、サポート体制を整えました。

世界で活躍できる医師・医学者を目指すための、海外クリニカル・クラークシップ制度。

世界中の人々に尽くす医師・医学者を目指す人のために、日本医科大学では医学英語教育に力を入れ、世界各国の医療機関や大学と協定を結び、積極的な国際交流を図っています。留学先は米国などの8つの提携大学をはじめ、海外の研究機関などへの留学も可能です。6年次の選択臨床実習（クリニカル・クラークシップ）では海外提携大学での実習も可能です。異国での実習体験は、グローバルな視野を獲得し、将来の方向性を考える上で貴重な体験となります。留学申請資格は、実践的英語能力をはじめ、CBTやOSCE、TOEFLなどで所定の成績を上げていることはもちろんですが、日本医科大学医学生としての誇りと見識を有し、留学への強い意欲を持っていることが必要です。



学是「克己殉公」の志を胸に、世界の医療に貢献した卒業生



野口 英世 Hideyo Noguchi

1897年、済生学舎に入学し、医術開業試験に合格。1900年に単身で渡米し、ペンシルベニア大学で助手として蛇毒の研究に従事した。その成果が評価され、奨学資金を得てデンマーク国立血清研究所に留学。帰米後はロックフェラー医学研究所の正員となり、梅毒スピロヘータの研究でノーベル賞候補となる。その後細菌学者としてエクアドル、アフリカなど世界で活躍し、黄熱病の研究に取り組んだ。

（公財）野口英世記念会提供



肥沼 信次 Nobutsugu Koenuma

日本医科大学を卒業後、1937年に日本の国費留学生としてドイツに渡り、ベルリン大学放射線医学研究所に入所した。第二次世界大戦終戦直後の1945年、当時発疹チフスのまん延していたグリーツェン市の伝染病医療センターに唯一の医師として着任し、半年間にわたる献身的な治療により、多くのドイツ人の命を救った。しかし、昼夜を問わない激務の末、自身も発疹チフスを発症し、37歳でこの世を去る。